



「文化」の持つ役割とは？



みなさんは**司馬遼太郎**さんの『坂の上の雲』という小説を知っていますか？四国の松山に生まれた俳人・正岡子規、軍人・秋山好古、真之兄弟の3人を主人公に、明治の日本を描いた歴史小説です。明治維新以降の日本は外国から盛んに新しい制度や技術を取り入れて国を発展させることに努めました。「殖産興業」や「富国強兵」という言葉は、みなさんも社会科の授業で聞いたことがあるのではないでしょうか？まさにタイトルにある「坂の上の雲」を目指して、上り坂をどんどんと上っていくように国が発展していく。明治はそんな時代として描かれています。

さて、今月紹介する本は、**平田オリザ**さんの『下り坂をそろそろと下る』です。オリザさんは劇作家で、『幕が上がる』（ももクロ主演で映画化もされました）の作者としても有名です。オリザさんはこの本の中で日本社会が抱えている問題について、様々な視点から考察した上で、現代の日本は「衰退期」を迎えていると述べています。具体的には、人口減少が進んで国力が衰退し、また周辺国の台頭などで、かつてのようにアジア唯一の工業立国としてやっていくことはもはや難しくなっている、といったことです。雲を目指して坂を上っていた明治とは逆に、坂を下っていく時代だということです。この本には、これからの時代に私たちがどのように生きていけば良いのかのヒントがたくさん隠されています。

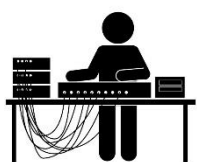
劇作家のオリザさんがどうして社会問題についての本を書くのだろう？と思いつつ読んでいましたが、これは著者が演劇を通じた町おこしや学校改革などに関わっていく中で感じたことをまとめたものようです。みなさんの身近な場所でいえば、兵庫県豊岡市の取組が挙げられています。豊岡市は城崎温泉やコウノトリで有名な町ですが、ここに城崎国際アートセンターという施設があります。劇団などのアーティストが、滞在しながら稽古や公演を行える施設で、こういった滞在機能を持つ公共ホールは欧米では一般的ですが、日本にはほとんど無いのだそうです。文化施設を充実させることで、豊岡市に国内外から様々なアーティストを招き、演劇などの作品を創る場を提供しているそうです。かつて『城の崎にて』で知られる志賀直哉をはじめとする多くの文豪が訪れた土地に、世界からアーティストたちが集うようになったのです。

また、豊岡市は教育の3本柱として①ふるさと教育②英語教育③コミュニケーション教育を掲げていて、その教育方針とアートセンターの機能がよくマッチしていると著者は述べています。アートセンターに滞在するアーティスト達と地元の小中学生が交流する機会を設けて、地元に住ながら常に海外の演劇作品などに触れられるようにしているそうです。

オリザさんは本の中で何度も「文化資本」という言葉を使っています。文化資本とは社会学の用語で、簡単に言うと「人と共に生きるためのセンス」のことなのだそうです。文化資本は幼い頃から多くの人と関わりながらコミュニケーションをとっていく中で身につくものです。文化資本を得るための取組として、演劇を通じた教育はとても効果があるとオリザさんは述べています。豊岡市の事例ではアーティストたちと交流する中でセンスを磨き、最終的には子供たち自身がみんなで協力して演劇作品を創るという取組も行われているそうです。

2020年には現在のセンター試験が廃止されて新しい大学入試が行われることはみなさんも知っていると思います。その試験で求められる力は思考力、判断力、表現力、主体性、多様性理解、協働性などだそうです。オリザさんによれば、そういった試験に対しては文化資本が無ければ太刀打ちできないそうです。そして文化資本は従来型の詰め込み教育ではなく、幼い頃から様々な人や文化に触れることによって培われていくものだと述べています。

演劇や映画などの文化は娯楽であって、直接は社会の役に立たないと思われてしまいがちです。しかし、「衰退期」を迎え、AIの台頭なども現実味を帯びてきた現代においては、様々な文化に触れることで「文化資本」を身に付け、多くの人と協働していける能力を培うことが、生きていく上で大切になってくるのかもしれない。



☆ 今月出てきた本の紹介 ☆

『坂の上の雲』（文春文庫 全8巻）司馬遼太郎著 文藝春秋社 2007年
『下り坂をそろそろと下る』（講談社現代新書）平田オリザ著 講談社 2016年
『幕が上がる』（青い鳥文庫）平田オリザ原作 講談社 2015年
『城の崎にて』（角川文庫）志賀直哉著 角川書店 1981年

